

# 〜おおいしだめとんとむがすあつたけど⑱〜

## おへどの稲荷 その一



徳川時代、天下の実権が、家康に移った頃の話である。水戸に佐竹義宣という殿様がいた。家康に従わないので、とうとう秋田に国替え（大名の領地を移しかえること）を命じられてしまった。佐竹の殿様が、秋田に向かう途中、一匹の白狐が苦しんでいるのを見つけた。家来たちが狐だと思いきや殺そうとした時、

「病気で苦しんでいるものは、狐と言えどもかわいそうだ。手当てをしてやれ。」  
と佐竹の殿様が言い、それで白狐は助けられた。そこで、白狐は、「お殿様、どうか恩返しをさせてください。」

と願い出た。お殿様は、この狐はただの狐ではない気がして、「しからば、予の家来となり、江戸と秋田の間（か）の間者（こ）となり、敵側の情報を探って味方に通報する人」となり、江戸の様子を報告してくれ。」と、言った。

そこで、白狐は、若者に化けて、名を与次郎と名のつて、江戸と秋田の間を恩返しのため、毎日走り続けた。狐なので、一夜に、百里（四百キロ）の道走るのだ。

与次郎がいつも泊まる宿としたのが、東根の六田の宿であった。この宿にはおはなという器量よしで気立てのいい娘がいた。与次郎は、この娘を好きになってしまった。また、おはなも与次郎を好きになり気持ちを打ち明けた。与次郎は、

「私は、人間ではなく白狐である。秋田の殿様への恩返しに間者となっているのだ。気持ちには有難いが応ずることができない。許してほしい。」  
と返事した。それでも、おはなはあきらめられず、与次郎

の来るのを待ち、大切にもてなしていた。

その頃、徳川幕府では、各地に隠密を送って、その様子を報告させていた。その隠密たちは、与次郎の行動に目をつけ、

「与次郎の足の速いのは、ただ者ではない。」  
と、さぐり始め、とうとう、白狐で、秋田の佐竹の間者ということが分かってしまった。

徳川の隠密たちが、六田の宿に泊まって、与次郎を殺す相談を始めた。狐を殺すには、狐の好物である鼠の天ぶらに毒を入れて食べさせようと相談しているのを、おはなは聞いてしまった。早く与次郎に知らせなければと思っているうちに、与次郎が宿に着いてしまった。おはなは、そっと与次郎を呼んで、

「今夜は、どんなことがあっても天ぶらを食べてはだめですよ。」と何回も言った。

案の定、隠密たちは、夜更けに裏の畑で毒入りの鼠の天ぶらを揚げ始めた。与次郎は、その匂いにさそわれて裏の畑に出ていった。おはなの話がちらついたが、どうしてもがまんできず、毒入りの鼠の天ぶらを食べてしまった。その後、隠密は、与次郎の死んだことを確かめて江戸へ引き上げていった。

朝、おはなが、裏の畑に行ってみたら、白狐が死んでいた。おはなは、そっと白狐を土に埋め、冥福を祈った。

秋田の殿様は、与次郎のことを聞き、六田に与次郎稲荷として、お堂を建てた。

【お話は次回につづきます】

◇出典 『大石田のとんとむがす』  
（大石田とんとむがすの会編集・発行、二〇一九年）



町の人口 令和3年12月1日現在		
世帯数	2,271 戸	(-15)
総人口	6,534 人	(-21)
男	3,231 人	(-6)
女	3,303 人	(-15)
(11月中の異動)		
出生	1 人	転入 7 人
死亡	13 人	転出 16 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

### 防災放送の内容を 電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時（夕方6時のメロディ等）放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

**確認ダイヤル：0237-48-8444**

■総務課総務グループ TEL35-2111（内線218）

### 大石田町公式アカウント開設 LINEはじめました

防災情報などを受け取ることができます。友だち登録をお願いします!

登録方法  
右のQRコードを読み取って友だちに追加してください。

大石田町公式LINE